

◆解説◆

高等教育におけるピアサポート導入の 教育的効果と期待

大石由起子

(山口県立大学 社会福祉学部准教授・学生相談室カウンセラー)

一 はじめに

ピアサポート (Peer Support) とは、仲間 (Peer) による援助 (Support) を意味し、西山 (二〇〇二) がよれば、「仲間による対人関係を利用した支援活動の総称」とされる。また、国立教育研究所による「生徒指導国際フォーラム」(二〇〇〇) では、ピアサポートを仲間支援の包括的用語とし、下位分類として、ピアカウンセリング (相談活動)、ピアチューター (学習支援)、ピアメンター (指導・啓発活動) など、個々の役割に沿った名称もある。このよ

うに、元来ピアサポートには言葉によるカウンセリング的な援助のみならず、実質的、行動的援助も含まれていた。

二 ピアサポート導入の背景にある学生事情

近年、日本の子どもや青年を取り巻く環境は、これまでに例を見ないほど煩雑になっている。情報の多様化、IT技術の進歩による情報伝達の加速化は、学生生活、それ以前の子どものたちの生活にも浸透し、彼らの生活を慌しいものになっている。また、コンビニエンスストアや携帯電話やメール等のツールは、便利さと快適さを提供する一方で、

子どもや青年たちから、欲求不満耐性や、Face to faceの直接的なコミュニケーションを身につける機会を奪い、自己中心性を温存したまま青年期に至るなど、未熟な若者を作り出している。また、学習塾をはじめスポーツ少年団や、音楽やダンスのお稽古事など、大人が提供するさまざまな放課後の活動は、子どもたちに各々の技能の向上を提供する一方で、本来の意味で自由な時間すなわち「暇な時間」を奪っている。このように物質的、情動的、組織的な豊かさの裏で、子どもたちは疲弊しているようにも感じられる。

このような環境にあつて、大学に入学してきた学生が、既に睡眠障害やリストカット、摂食障害など様々なメンタルプロブレムを抱えている場合も少なくない。また、受験という目的の元に棚上げしてきた、自分自身への問いかけを、大学入学後あるいは卒業を控えて始める学生も多く、大学のモラトリアム期間の中でアイデンティティ確立の七転八倒を展開することになる。青年期は昔から「疾風怒涛の時代」と呼ばれ、自殺などの問題も近年に限ったことではないが、昨今の時代の煩雑さと若者の脆弱さ故か、大学のサービスマ務の充実の故か、本学においても学生相談室や保健室を利用する学生の数は増加の一途をたどっている。

そして何より注目すべきは、他者への介入の不足、つま

り良くも悪くも相手に立ち入らないこと、「そつとしておく」ことを「やさしさ」として大事にする対人関係の持ち方であろう（大平健一九九五）

現代において、介入しない人間関係の持ち方は、マンシヨンの「となりは何をする人ぞ」のように若者のみならず大人にも見られ、それは地方都市にも浸透しつつあるようだ。そのような人間関係は、個人が平穩に暮らせている間は快適なものであるが、危機的な状況に陥ったときには、SOSを発しにくく容易に孤立してしまうという脆弱さを持つている。大学生の場合においても、大学に來ている間はそこそこ人間関係を築いていた人が、無気力状態になったり、引きこもったりした時に、周囲は初めのうちこそメールや携帯電話での呼びかけはするものの、本人が応答しなければ、「そつとして」おかれてしまう。皆が「おせっかいな人」になることを恐れているかのようである。場合によっては、本人の意思に反してでもドアをノックし、踏み込む必要があるが、その迫力は、今や家族にさえない場合もある。

もうひとつ、学生の軽重浮薄への志向、すなわち「明るいこと」「軽いこと」が話題や人間関係で重視され、逆に「暗いこと」「重たいこと」は敬遠され、日常の人間関係が表



新学期ピアサポート活動の入口風景

層的な関係に留まっているということも注目すべきことである。若者は悩んでいることや生きることそのものを問うような深刻な話題は日常の人間関係の中には持ち込まず、密かに新興宗教の世界に耽溺したり、匿名性に守られたインターネットの人間関係に救いを求めたりする。

三 ピアサポート導入の第一義的目的

このように、学生の日常の人間関係の中で取り上げられることのない心の深い悩みや混乱を専門的な領域で取り扱っていかうとしたのが、学生相談室や保健管理センターにおける学生相談、カウンセリングである。これは、大人の

専門家による学生へのメンタルサポートである。しかし実際にカウンセラーのところに持ち込まれる相談は、生死に関わったり修学不振に陥ったりするものから、ちょっとした情報提供で済むものまで千差万別である。心理専門職としてのカウンセラーでないと関わ

れない問題は専門職に任せるとして、その手前のちょっとした悩みや疑問、先輩学生の経験でも答えられる、情報提供で解決するような相談のニーズに学生が応えられるのではないか、また、ちょっとした相談に来た学生の中にある潜在的な深い悩みや問題に気づいて、専門家への橋渡しをする、そのような形で学生支援の領域に学生自身を組み込んでいこうとしたのがピアサポートの第一義的目的であった。

四 ピアサポートにおける学生の二つの立場とピアサポート導入の教育的効果

―援助学生（ピアサポーター）と被援助学生（クライアント）―

先に述べたように、ピアサポートはちょっとした悩みを抱え援助を必要とする学生（来談者の意でクライアントと呼ぶことにする）に、学生（ピアサポーター）が相談援助を行うものであり、第一義的にはクライアント側の学生のための活動である。

しかし、援助者として志願してきたピアサポーターの側に焦点を当ててみると、ここに教育上の重要な四つの視点

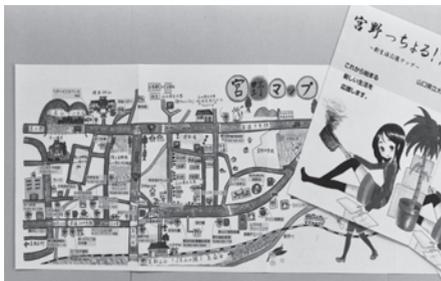
が見出される。

1. 対人援助のスキルや態度を学ぶ場を提供できる

ピアサポーターは学生のボランティアな活動であるが、相談援助という性質上、養成のための教育プログラムが必要である。本学においても、夏季と春季に集中の研修プログラムを用意し、ピアサポーターになるにはこの研修を受講することを必須にしている。研修内容は、カウンセリングのロールプレイを中心として相談援助のスキルを学ぶだけでなく、構成型エンカウンターグループのワークなども取り入れ、自己理解、他者理解を体験学習によって深める内容となっている。本学は社会福祉、看護栄養、国際文化の三学部からなる全学一四〇〇人程度の小規模大学であるが、実際にピアサポーターを志願してくる学生の動機を問うと、将来ソーシャルワーカーや養護教諭、看護師、教員になった時に役に立つことを理由に挙げる学生が半数を超える。

2. 来談者が来ない時間に学生援助のための準備活動を創造する

ピアサポーターに志願してくる学生は、日常的に多くの



ピアサポーター作成による新生活応援マップ
「宮野っちょる!？」

学生の相談に乗ることを期待してくる。しかし実際のところ、新学期やオープンキャンパスなど特定の時期には来談者が賑わうが、その後学生生活が軌道に乗り、自前の人間関係が形成されてくると来談者はめっきり減ってくる。これはとても自然なことであり好ましい事態であるが、ピアサポーター側からすると、相談に乗ろうと待ち受けているのに、「閑古鳥が鳴いて」相談活動ができずピアサポート活動のモチベーションが低下するという状況が起こる。この問題は、複数の大学の実践で報告されており、ピアサポ

ート活動を展開する上で
の普遍的なテーマの一つ
である。モチベーション
が下がったままピアサポ
ーターが脱落していけ
ば、ピアサポート活動の
危機にもなりかねない
が、多くの場合、学生た
ちは相談者の来ない時間
を、相談のための資料作
成やロールプレイ等の自
己研修を行うことで、乗

り越えてきた。それは、実際の相談活動において、クライエント側の学生のニーズに触れ、提供する情報の幅を広げ質を高める必要性を感じたことや、自身の傾聴能力の未熟さを実感したことによるものでもある。本学においても、学生生活上で困った時の対応マニュアルや各相談窓口についての資料作成などを行い、そこから新入生のための必要な情報を掲載した大学周辺のオリジナルマップ作りなどユニークな活動にも発展した。

3. ピアサポーター集団がセルフヘルプ集団として機能する

先にピアサポーターの志願動機として、相談援助のスキルを学ぶためということを挙げたが、それとは別に、自身も入学したころ不安だったがピアサポーターが頼もしく見えたとか、援助してもらったので今度は援助してあげたいといった理由も多くみられる。それは、カウンセラーになりたい、ソーシャルワーカーになりたい等の動機の背景に、しばしば自身の癒され体験や願望が潜んでいることがあるのと同じであろう。先の学生事情に述べたように、日常の学生同士の友人関係が表層的であることに物足りなさを覚える学生や、「軽い」「明るい」ノリについていけないと感

じる学生が、「もつとちゃんと人と関わりたい」という欲求をもって志願してくる場合がある。彼らは、学科の級友たちの間では、必ずしも中心的な存在ではないが、ピアサポート活動の集団の中では、生き生きと本領を発揮する。また、自身の日常の学生生活でのストレスなどを、ピアサポートのメンバー間で語り合う。相談者の来ない「暇な」時間は、自然とピアサポーター同士の相互援助活動の時間ともなっているのである。

4. ピアサポート活動を通して自身の対人関係能力を磨き、自分への気づきを得る

ピアサポート活動に志願する学生は、必ずしも自分の対人関係の持ち方に自信を持っているわけではない。むしろ苦手意識を持つていることも少なくない。ピアサポート活動に参加することを通して、自身の対人関係の持ち方、すなわち相手への踏み込み方、見守り方、距離の取り方を模索し、人との言葉による交流（実はそこには非言語的なコミュニケーションも含まれているのであるが）により、自己について新たな気づきを得ることがある。ピアサポート活動は、援助志願の学生にそのような自分自身についての学びの場を提供しているのである。

五 ピアサポート活動への期待

以上のように見てみると、ピアサポート活動は、相談学生（クライエント）も援助学生（ピアサポーター）も共に成長過程にある青年であり、クライエントは援助を受けることによって、ピアサポーターを育てていると見ることもできよう。援助する側とされる側が縦の関係ではなく、実はお互いを育てあっているというのが、福祉における「共生」の思想であるが、ピアサポート活動も、学生同士の「共生」を促進するものであろう。

昨今の若者が表層的な人間関係に逃げ、その一方で深く関われないジレンマを抱えているとすれば、ピアサポートという試みは、そのような学生たちに、もう一歩踏み込んで人と関わる機会を与え、関わり方を体験的に模索する場を提供しているといえる。そして大学キャンパス内に、そのような相互援助、共生の風土を培っていく一つの試みとして期待されるのではないだろうか。

文献

西山久子、山本力（二〇〇二）実践的ピアサポートおよび仲間支

援活動の背景と動向、岡山大学教育実践総合センター紀要、第

二巻八一―九三

大平健（一九九五）「やさしさの精神病理」岩波書店

大石由起子、木戸久美子、林典子、稲永努（二〇〇七）ピアサポ

ート・ピアカウンセリングにおける文献展望、山口県立大学社

会福祉学部紀要、第一三号、一〇七―一二一

大石由起子、林典子、稲永努（二〇一〇）大学における新入生支

援としてのピアサポート活動―立ち上げの二年間をめぐる考察

―、山口県立大学社会福祉学部紀要、第一六号、二九―四四